

# 認知症介護の研究テーマと その時代的変遷 —日本の学術情報タイトルの Text Mining—

原 直輝\*・石田 航\*\*・  
いとうたけひこ\*\*\*

## The Research Theme of Dementia Caring and It's Historical Transition -A Text Mining Analysis of Article Titles-

Naoki HARA\*, Wataru ISHIDA\*\* and  
Takehiko ITO\*\*\*

In this study, we analyzed how the focus of research has changed in dementia caregiving research in Japan, targeting academic information titles with the keywords "dementia and caregiving" in the database CiNii. Text Mining Studio 6.3.0 was used for the analysis. The amount of academic information in the database gradually increased from the 1980s, reaching a peak in 2004. Before the name change, until 2003, the focus was on the medical view and the disease, not the patients themselves; after 2004, the focus was on the intentions and inner life of the dementia patients themselves, and the patients have been taking part in the care team.

key words: gerontology, nursing care, aging

### 問 題

本邦は1980年代に長寿・福祉社会を目指すゴールドプランを策定した。その後、高齢者が増加するに従いより高齢者、特に認知症に関する施策としてオレンジプランを始めとした

ガイドラインの策定を行い、今年度には認知症患者との共生を目指す認知症基本法が成立した。

認知症とは慢性もしくは進行性の脳疾患によって、記憶や見当識等の複数の高次脳機能の障害からなる症候群である (WHO, 1993)。認知症は進行に伴い社会生活を送ることを困難にするため、介護を要する患者は多い。当初は痴呆と呼ばれていたが、2004年に認知症と名称が変更された。

認知症患者の介護では、本人や周囲の人々の心身の健康に様々なリスクが生じる。介護者側のリスクとしては、ストレスの増大やそれに伴う免疫機能低下が指摘されている (Vitaliano et al, 2003)。一方、介護される側の視点からは、認知症患者は能力低下により譲歩しなければならない事への抵抗や病が生活を支配しているという感覚から精神的に孤立し家族との関係構築が難しくなるという指摘がある (鳥居ら, 2011)。つまり、認知症介護においては患者・介護者、支援者を包括的に捉え支援する必要がある。

本邦では、「自宅介護」から「入院治療」、そして現在の「地域への復帰」という様に認知症患者に対する支援形態は変遷してきた。そこで、本研究では今までの認知症介護研究を振り返りながら、今後さらに多角化する支援においてどのような研究が求められるかを考察し、介護現場における新たな視点構築の一助とする。

本研究の目的は、学術情報のタイトルを分析し、認知症介護にどのような研究があり、2004年の「痴呆症」から「認知症」への名称変更に伴い研究テーマがどのように変遷したかを検討することである。

### 方 法

**研究対象** 「CiNii Articles」に公開されている学術情報を対象とした。

**手続き** 検索キーワードには「認知症&介護」と「痴呆&介護」を使用し、出力された学術情報のタイトルを分析した。検索は対象期間を定めず、2022年4月16日に実施した。

**分析手順** NTT データ数理システム「Text Mining Studio 6.3.0」を用いて、基本統計量、単語頻度解析、係り受け頻度解析を行った。その際、特に「痴呆」と「認知症」の2つのキーワードに着目し、分析を行った。

**倫理的配慮** 本研究は、認知症の介護に関する基礎研究として、ヘルシンキ宣言、及び研究責任者・調査実施者が所属する日本応用心理学会の倫理綱領を順守して実施した。

### 結 果

1. **記述統計** 学術情報の総数は15204件であった (Figure 1) なお、破線は認知症に名称変更された2004年を示す。単語頻度解析の上位5語は、「特集」(2490件)、「痴呆」(2050件)、「認知症」(1899件)、「介護」(1054件)、「検討」(836件)であった。

\*一般社団法人メンタルヘルス・ビューロー

General Incorporated Association Mental Health Bureau, 1-3-16 Takadanobaba Shinjuku-ku Tokyo 161-0033, Japan.

(haranaoki1015125@gmail.com)

\*\*帝京大学文学部心理学科

Department of Psychology, Teikyo University, 359 Otsuka Hachioji-shi Tokyo 192-0395, Japan.

\*\*\*和光大学現代人間学部心理教育学科

Department of Psychology and Education, Wako University, 5-1-1 Kanaigaoka Machida-shi Tokyo 195-8585, Japan.

Figure 1 各年毎の学術情報数

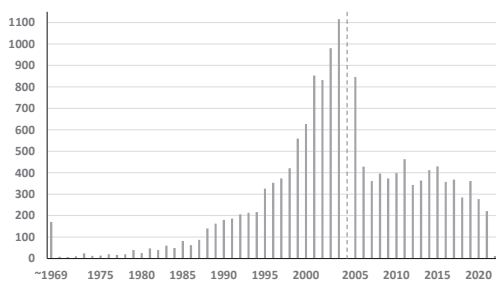
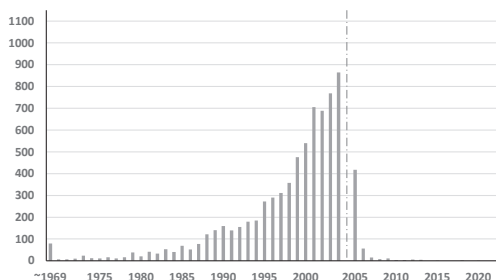


Figure 2 「痴呆」をタイトルに含む学術情報の出現数



また、「痴呆」をタイトルに含む学術情報は7503件、「認知症」をタイトルに含む学術情報は4195件、「痴呆」と「認知症」の両方を含む学術情報は110件、「痴呆」と「認知症」の両方をタイトルに含まない学術情報は3396件であった。本研究では、「痴呆」をタイトルに含む学術情報と「認知症」をタイトルに含む学術情報を考察する。

2. 「痴呆」をタイトルに含む学術情報 該当する学術情報は7503件であった。係り受け頻度解析の上位5ペアは、「診断-治療」(90件)、「痴呆-伴う」(80件)、「アルツハイマー型痴呆-診断」(56件)、「痴呆性老人-介護」(40件)、「生活支援-障害」(36件)であった (Figure 2)。

3. 「認知症」をタイトルに含む学術情報 該当する学術情報は4195件であった。係り受け頻度解析の上位5ペアは、「医療-介護」(79件)、「特集-介護」(49件)、「認知症-理解」(48件)、「認知症-介護」(44件)、「認知症-生きる」(42件)であった。2004年に初めて学術情報が出現し、2005年に文献数が急増、凸凹があるものの2011年がピークとなり、その後徐々に減少する山型の推移をしていた。

## 考 察

1. 学術情報総数 学術情報全体の出現数の推移は、1980年代以降徐々に増加し2004年にピークを迎えた。1982年に公衆衛生審議会において「老人性精神保健対策に関する意見」が発表されており、この意見書を皮切りに痴呆への関心が増したと推測される。また、出現数のピークである2004年には痴呆患者への偏見解消意識の高まりから「痴呆」に替わる

用語に関する検討会」が設置されており、学術情報の増加とこの検討会の設置が連動していた。

2. 「痴呆」・「認知症」をタイトルに含む学術情報 「痴呆」と呼ばれていた頃は、他分野を含めた包括的なケアへの関心が希薄だったことが推察された。当時の学術情報タイトルを分析すると「診断-治療」や「アルツハイマー型痴呆-診断」といった係り受けの出現が多く見られた。つまり、「痴呆」が使用されていた2003年までは概ね診断を中心とした医学的観点が重視されていたことが分かる。その様な状況では患者自身よりも疾患を診ることが優先されがちになり、治療・介護の方針を決定する際に医療者側の意見に重点が置かれていたと考えられる。

一方、「認知症」と呼ばれる現在は患者自身がどの様に生きたいかという事に焦点が置かれている。認知症をタイトルに含む学術情報のタイトルを係り受け分析したところ、「医療-介護」や「認知症-理解」、「認知症-生きる」といった係り受けの出現が多かった。これは、「患者の主体性」を重視する昨今のチーム医療の考えが影響していると考えられる。その為、介護においても患者本人を介護チームの一員と位置づけ、彼らの意思決定や思いを重視する風潮が高まったと推察された。つまり、今後は一層患者本人の意思決定を中心とした横断的な分野に跨るチーム支援の在り方の模索が求められる。また、心理学的に重要な課題、例えばエイジズムがあげられる。「老い」に関する偏見は根強く、加齢が認知症のリスク要因であることもその一端を担っている。痴呆症から認知症に名称が変更され、状況が改善された。さらに、今後もエイジズム克服を含め心理学的課題を理論的・実践的に解決することにより当事者とその家族のQOLがますます高まるだろう。

## 引用文献

- デジタル庁 (2023). 共生社会の実現を推進するための認知症基本法 Retrieved October 26, 2023, from [https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=505AC1000000065\\_20240615\\_0000000000000000](https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=505AC1000000065_20240615_0000000000000000)
- 鳥居千恵・倉田貞美 (2011). 認知症の患者が主たる家族介護者との新たな関係性を構築していくプロセス——新たな関係性を育む環境と関係性構築を困難にする環境—— 老年看護学, 16(1), 57-65. [https://doi.org/10.20696/jagn.16.1\\_57](https://doi.org/10.20696/jagn.16.1_57)
- Vitaliano, P. P., Zhang, J., & Scanlan, J. (2003). Is caregiving hazardous to one's physical health? A meta-analysis. *Psychological Bulletin*, 129 (6), 946-972. <https://doi.org/10.1037/0033-2909.129.6.946>
- World Health Organization (1993). *International Statistical Classification of Diseases and Related Health Problems: 10th Revision*. Geneva: World Health Organization.

(受稿：2023.6.25；受理：2023.12.1)